

23 年センター試験平均点は、 文・理系型とも3年ぶりに大幅アップ！

5(6)教科 7 科目平均点(900 満点/加重平均)；

文系型 **533.7** 点(+20.7 点) / 理系型 **531.1** 点(+22.0 点)

基幹科目の数学 I・A 大幅アップ、国語アップ。英語前年並み、数学 II・B ダウン。
受験者大幅増の物理 I、化学 I アップで、「理系」に弾み！

旺文社 教育情報センター 23 年 2 月

23 年センター試験は志願者 55 万 8,984 人(前年比 1.0%増)、受験者 52 万 7,793 人(同 1.4%増)で、ともに 3 年連続の増加である。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、国公立大センター試験の文系及び理系の標準型<5(6)教科 7 科目；900 点満点>の加重平均点を旺文社で算出した結果、文系型 533.7 点、理系型 531.1 点で、ともに 3 年ぶりの大幅アップとなった。

過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■文系型・理系型の「5(6)教科 7 科目」平均点

◎ 国公立大のセンター試験(以下、セ試)科目は、国立大を中心に 5(6)教科 7 科目(900 点満点)が主体となっている。標準的な受験科目の編成としては、次の 2 タイプである。

文系標準型(900 点満点)＝国語＋地歴＋公民＋数学 2 科目＋理科 1 科目＋外国語

理系標準型(900 点満点)＝国語＋地歴・公民から 1 科目＋数学 2 科目＋理科 2 科目＋外国語

このため、各科目の平均点と受験者数から割り出す全体の平均点(加重平均)も、文系型と理系型とに分けて算出。英語は「筆記＋リスニングテスト」の得点率を基に 200 点満点に換算。

- 文系標準型平均点＝533.7 点(前年より 20.7 点アップ)
- 理系標準型平均点＝531.1 点(同、22.0 点アップ)

◎「文・理系」志望者の実態を推測

上記の文系型、理系型の平均点は、私立大型を含む全受験者の「加重平均」の集計結果である。実際の国公立大理系志望者(5 教科 7 科目)は、平均点大幅アップの物理 I(+10.1 点)、同じくアップの化学 I(+2.8 点)に加え、理系志望者の受験が多い現代社会もアップ(+3.0 点)したことから、文系志望者(6 教科 7 科目)に比べ、よりアップしたことが推測される。

一方、文系志望者にあっては、理科における受験が多い生物 I(-6.3 点)や地学 I(-2.5 点)などの平均点ダウンから、理系志望者ほどの平均点アップにはいたらなかったとみられる。

本稿で集計した「加重平均点」では、理系標準型の理科 2(3)科目受験組の集計において物理 I・化学 I のアップと、生物 I や地学 I などのダウンとが相殺される形になる。

また、文系標準型では、軒並み平均点アップとなった地歴・公民の計 2 科目受験組の集計となる。その結果、理系標準型と文系標準型との平均点差は、理系標準型の方がわずかに低く、実際の理系志望者と文系志望者との平均点差とは逆の形になったものと推測される。

●平成23年度大学入試センター試験平均点等一覧(確定)

<平成23年2月3日 大学入試センター発表>

教科名	科目名	平成23年(確定)		平成22年(確定)		平均点の 対前年差	受験者数の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
文系標準型平均点(900点満点)		—	533.7	—	513.1	20.7	—	
理系標準型平均点(900点満点)		—	531.1	—	509.1	22.0	—	
国語(200点)	国語	505,214	111.3	497,431	107.6	3.7	7,783	
地理歴史 (100点)	世界史A	2,092	48.4	1,979	52.3	▲ 3.9	113	
	世界史B	88,303	61.5	91,118	59.6	1.8	▲ 2,815	
	日本史A	4,622	52.0	4,094	48.4	3.6	528	
	日本史B	152,970	64.1	151,792	61.5	2.6	1,178	
	地理A	5,341	52.6	4,980	53.6	▲ 1.0	361	
	地理B	113,769	66.4	110,093	65.1	1.3	3,676	
公民 (100点)	現代社会	177,843	61.8	171,419	58.8	3.0	6,424	
	倫理	58,278	69.4	55,849	68.7	0.8	2,429	
	政治・経済	88,758	59.0	89,887	59.2	▲ 0.2	▲ 1,129	
数 学	数学① (100点)	数学Ⅰ	8,614	44.1	9,555	40.9	3.3	▲ 941
		数学Ⅰ・A	377,714	66.0	368,289	49.0	17.0	9,425
	数学② (100点)	数学Ⅱ	7,185	31.7	7,018	35.9	▲ 4.2	167
		数学Ⅱ・B	340,620	52.5	331,215	57.1	▲ 4.7	9,405
		工業数理基礎	60	42.9	67	48.5	▲ 5.6	▲ 7
		簿記・会計	1,372	50.9	1,367	40.8	10.2	5
情報関係基礎	650	63.5	606	59.9	3.6	44		
理 科	理科① (100点)	理科総合B	20,160	54.6	16,372	64.8	▲ 10.3	3,788
		生物Ⅰ	190,693	63.4	184,632	69.7	▲ 6.3	6,061
	理科② (100点)	理科総合A	37,109	55.6	29,315	63.4	▲ 7.8	7,794
		化学Ⅰ	213,757	56.6	208,168	53.8	2.8	5,589
	理科③ (100点)	物理Ⅰ	152,627	64.1	147,319	54.0	10.1	5,308
地学Ⅰ	25,231	64.3	24,406	66.8	▲ 2.5	825		
外 国 語 (200点)	英語	筆記(200点)	519,538	122.8	512,451	118.1	4.6	7,087
		リスニング(50点)	513,817	25.2	506,898	29.4	▲ 4.2	6,919
		筆記+リス(200点)	—	118.4	—	118.0	0.4	—
	ドイツ語	132	142.2	124	150.1	▲ 8.0	8	
	フランス語	151	142.4	165	134.8	7.6	▲ 14	
	中国語	392	134.1	364	138.0	▲ 3.9	28	
	韓国語	163	149.9	167	150.0	▲ 0.1	▲ 4	

- <注>① 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴と公民2科目受験(200点)、数学①と数学②の2科目受験(200点)、理科①、②、③合わせて集計100点)、外国語(200点:英語は筆記<200点>+リスニング<50点>の得点率を基に200点満点に換算)の加重平均点。
 ② 理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目(2科目受験組及び3科目受験組における平均点の高得点2科目から算出した200点)とする5教科7科目の加重平均点。
 ③ 文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。
 ④ 表中の「平均点の対前年差」は、四捨五入の関係で「23年-22年」と一致しない場合もある。
 ⑤ 5教科6科目(文系・理系共通の800点満点を900点満点に換算)の加重平均点は529.8点で、22年より21.0点のアップ。
 ⑥ 得点調整は、対象科目間の平均点差の最大が「倫理-政治・経済」=10.5点で、20点差以内に収まり、実施されなかった。
 ⑦ 表中の▲印は、対前年差のダウンまたは減少を示す。

主な科目の平均点アップ・ダウン & 受験者増・減

<平均点アップの主な科目>

数学Ⅰ・A(+17.0点、2.6%増)／国語(+3.7点、1.6%増)／英語(+0.4点<筆記+リスニング>)／物理Ⅰ(+10.1点、3.6%増)／化学Ⅰ(+2.8点、2.7%増)／日本史B(+2.6点、0.8%増)／世界史B(+1.8点、3.1%減)／地理B(+1.3点、3.3%増)／現代社会(+3.0点、3.7%増)／倫理(+0.8点、4.3%増)など。

<平均点ダウンの主な科目>

数学Ⅱ・B(-4.7点、2.8%増)／生物Ⅰ(-6.3点、3.3%増)／地学Ⅰ(-2.5点、3.4%増)／政治・経済(-0.2点、1.3%減)など。

注。()内の前記数値は平均点の対前年差、後記の数値は受験者数の対前年比増減。

■5教科6科目(文・理系型共通)平均点の推移

◎ 過去の文・理系型共通の5教科6科目(国語、地歴・公民から1科目、数学2科目、理科1科目、外国語)の平均点(加重平均点、800点満点)と比較するため、23年の「5教科6科目」平均点(900点満点に換算。以下、同)を算出した。結果は22年より21.0点アップの529.8点(得点率58.9%)となり、3年ぶりに上昇に転じた(下図参照)。

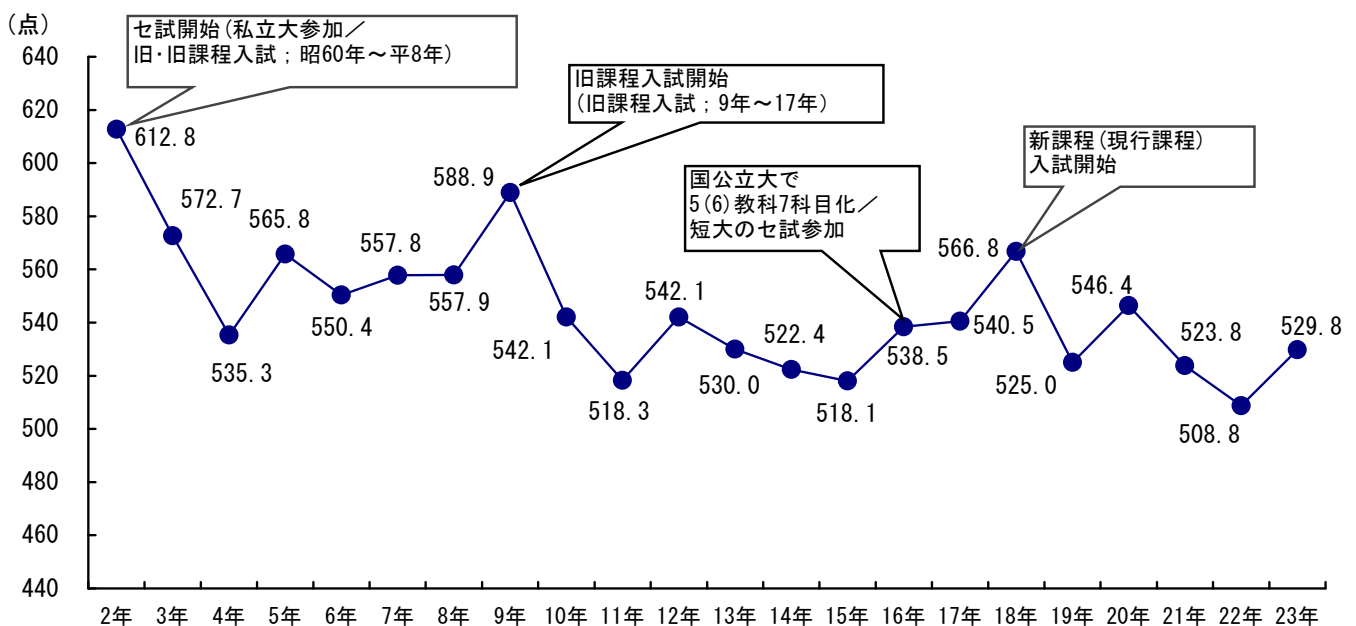
◎ 2年はセ試開始の年で、平均点612.8点(得点率68.1%)はこれまでの最高である。9年は旧課程入試の始まった年で、平均点は8年より31.0点アップした。10・11年とも、国語I・II、数学I・A、英語などのダウンで、特に11年の平均点は518.3点まで低下。16年は国立大を中心に5(6)教科7科目が本格化し、国語I・II、数学I・Aなど、基幹3科目のアップが全体の平均点を大きく押し上げた

新課程(現行課程)入試開始の18年は、英語、国語、数学II・Bなどのアップで前年より26.3点アップの566.8点の高得点。19年は国語、数学I・A、数学II・Bなど、一部の文系科目を除き軒並みダウンし、前年より41.8点の大幅ダウン。20年は英語の平均点が筆記、リスニングテスト(以下、リスニング)ともダウンしたが、数学I・A、国語、現代社会、地理B、化学I、数学II・Bなどのアップで、前年より21.4点の大幅アップ。21年は英語(筆記、リスニングとも)、国語、数学I・Aなどの平均点ダウンで、再び前年より22.6点の大幅ダウンとなった。22年は英語(筆記、リスニングとも)、数学II・Bはアップしたが、国語、数学I・Aの基幹科目のほか、公民に加え物理Iと化学Iが大幅にダウンし、過去最低の平均点となった。

◎ 23年は、数学II・Bがダウンし、理科が物理I、化学Iのアップと生物I、地学Iなどのダウンとが相殺する中で、基幹科目の国語、数学I・Aのアップ、英語の前年並み(筆記アップ、リスニングはダウン)に加え、地歴と公民も軒並みアップして大幅アップにつながった。

◎ 入試改革や教育課程改編に伴う出題科目・内容の変更時のセ試は、平均点アップの傾向がみられる。最近では18年の新課程入試開始時のアップ以降20年を除き、低下傾向にあった。

●センター試験(本試)5教科6科目加重平均点(文・理系型共通; 900点満点に換算)の推移



注) 大学入試センター発表の科目別平均点と受験者数から、5教科6科目(地歴・公民合わせて100点、理科1科目として100点<文・理系型共通>の800点満点)の加重平均点を旺文社が算出。16年からの5(6)教科7科目(900点満点)に合わせ、900点満点に換算。18年は「経過措置」科目のデータを除外してある。

■英語;筆記+4.6点、リスニング-4.2点で、「筆記+リスニング」は0.4点アップ

◎ 23年の英語の平均点は筆記の4.6点アップに対し、リスニングが4.2点ダウンした。

筆記は、全体を通して前年とほぼ同じ出題形式で、総語数はやや増加したが、第6問の長文読解の語数がやや減少した。全体的に標準的な問題でやや易化し、平均点アップにつながったようだ。

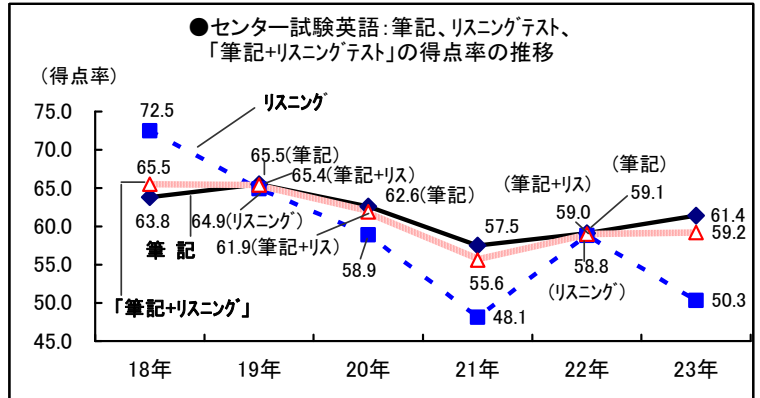
一方、リスニングは形式、内容ともほぼ前年を踏襲しているが、英文量のやや増加、読み上げ速度のややアップ、聴き取った情報の分析、処理などの点で難化したようだ。

リスニングは、18年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、19年32.5点(同64.9%)→20年29.5点(同58.9%)

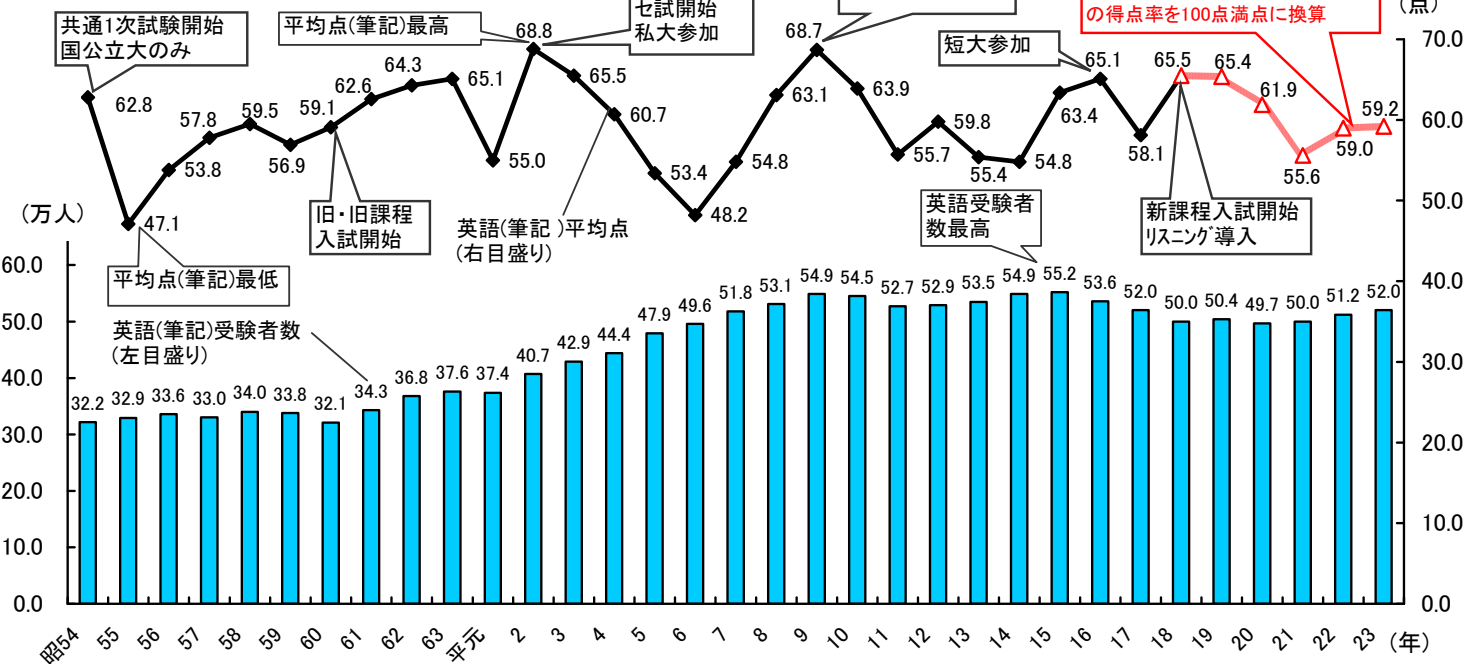
→21年24.0点(同48.1%)と、3年連続ダウン。22年は29.4点(同58.8%)で上昇に転じたが、23年は25.2点(同50.3%)と再び下降した。

「筆記+リスニング」の得点率(旺文社算出)も、18年65.5%→19年65.4%→20年61.9%→21年55.6%とダウンしていたが、22年は59.0%にアップ。23年の得点率もわずかにアップし(59.2%)、得点は118.4点(200点満点換算)で、ほぼ前年並みとなった(上図参照)。

◎ ところで、英語(筆記:23年受験者約52万人)は例年、ほぼ全てのセ試受験者が受験するため、その平均点のアップ、ダウンは文・理系型共通の5教科6科目の加重平均点のアップ、ダウンと重なる部分が少なくない(下図とP.3のグラフを比較参照)。



●共通1次・セ試「英語」平均点等の推移



注. 昭和54(1979)年~平成17(2005)年は「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降は「筆記+リスニング」の平均点(得点率を100点満点に換算)を折れ線グラフで表示。棒グラフは受験者数。

■国語;3年ぶりの平均点アップで、得点率は“5割台半ば”に回復

◎ 英語に次いで受験者の多い国語(23年受験者約50万5,000人)について、前回の旧課程入試の始まった9年から23年までの平均点と受験者数の推移を下図に示した。

◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

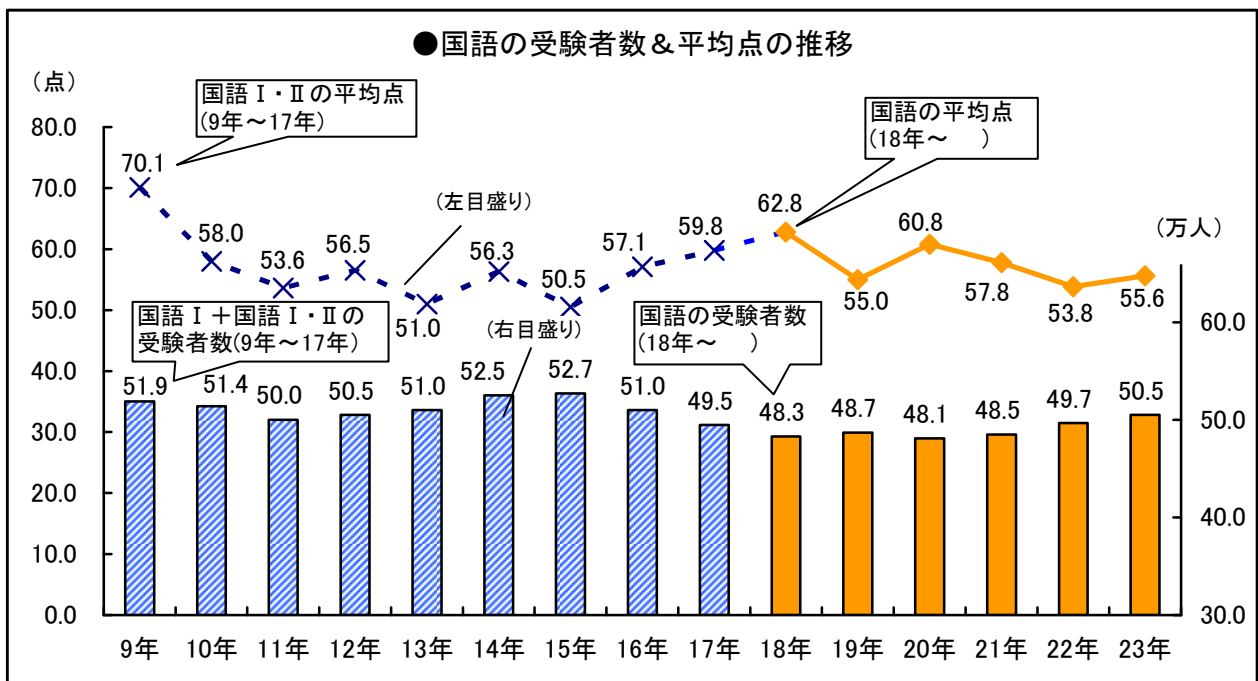
その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、3年連続上昇し、新課程(現行課程)入試開始の18年には62.8点で9年に次ぐ高得点となった。

しかし、19年は大幅にダウンし、再び50点台半ばまで急落。20年は平均点が大幅にアップし、得点率も2年ぶりに6割台に戻った。21年は再び平均点ダウンとなって得点率も5割台後半となり、文系型、理系型それぞれの加重平均点を引き下げる要因の一つとなった。

22年は、古文・漢文が難化し、全体として平均点ダウンにつながり、得点率は5割台前半まで低下した。

◎ 23年は、例年通りの出題構成と分野(近代以降の文章2題<評論・小説>、古文1題、漢文1題)で、問題文の分量が評論、小説、古文及び漢文とも増加。漢文が難化したほかは、全体としては前年並みかやや易化し、平均点アップにつながったようだ。

ただ、国公立大ではほとんどが古文・漢文を必答としており、特に国公立大理系志望者にとって、漢文は厳しかったようだ。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。

2. 200点満点を100点満点に換算。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは+17.0点の大幅アップで66.0点。数学Ⅱ・Bは-4.7点で52.5点。
数学Ⅰ・Aは前年急落、初の40点台から一気に“V字”回復

◎ 数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人を超える受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、23年までの22回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

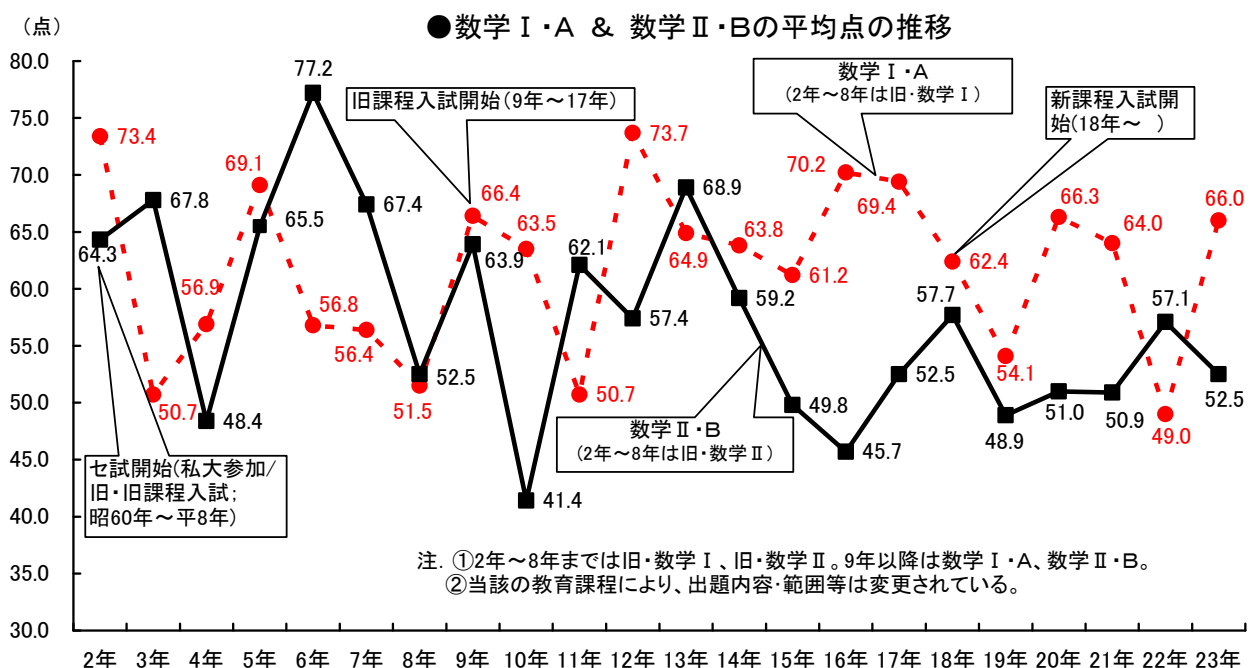
一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点である。

◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は23年も含め、過去22回の試験(本試)で50点未満が5回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

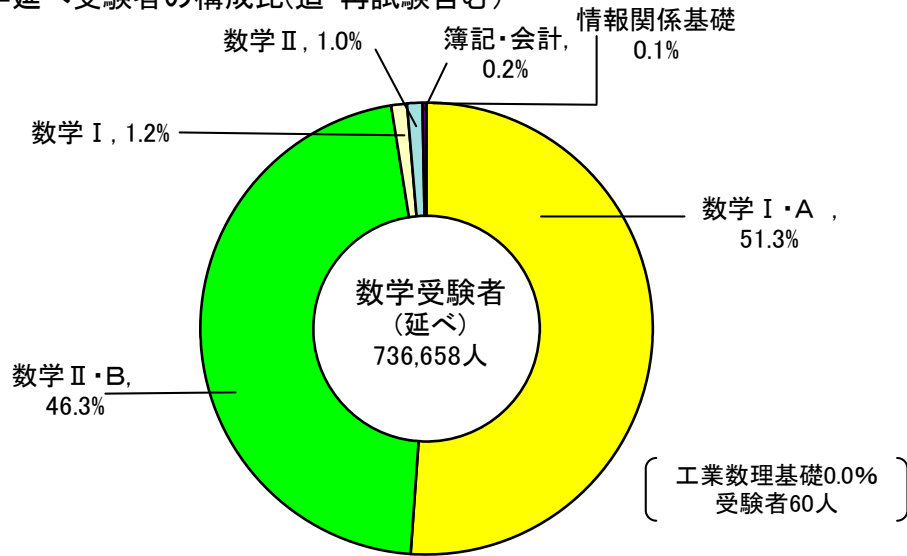
◎ 23年の数学Ⅰ・Aは、問題数、出題構成は前年と同じだが、前年、大幅な平均点ダウンの要因の一つになったとみられる第3問(図形と計量、平面図形)、及び第4問(場合の数と確率)に、解答へ導く前年以上の丁寧な誘導がつくなど、全体として易化しており、大幅な平均点アップにつながったようだ。

23年の数学Ⅱ・Bは、難易度としては比較的平易な出題であった前年に対し、今回は標準的な問題だったといえよう。ただ、第1問[2]の対数不等式に教科書では見かけない式が出題されたり、選択問題の第3問(数列)にセ試としては珍しい数直線上の点を題材とした階差数列が扱われたり、戸惑った受験生も少なくなかったようで、平均点ダウンにつながったとみられる。

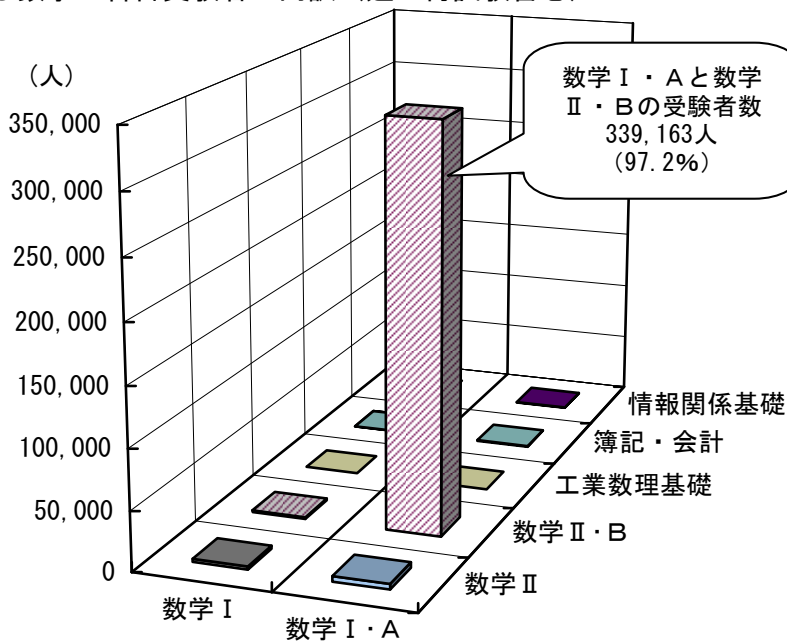


□数学2科目受験は、「数学I・A + 数学II・B」で約33万9,000人(2科目受験者の97.2%)

●数学延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●数学2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



(人)

	数学II	数学II・B	工業数理基礎	簿記・会計	情報関係基礎
数学I	2,554	1,377	13	269	61
数学I・A	4,564	339,163	44	427	452

■**公民**;前年の平均点軒並みダウンから一転、現社 +3.0 点、倫理・政経は前年並み

◎ 国公立大の5教科6科目(地歴と公民から1科目)が主流であった時代は所謂“公民保険”として、「地歴・公民ダブル受験」の傾向が見られた。

しかし、16年から本格化した国公立大文系の6教科7科目により、公民は文系標準型の“必須科目”となった。そのため、16年の公民受験者は、史上最多の約33万人を記録した。

◎ 新課程(現行課程)入試となった18年から、公民の時間割はそれまでの2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、初日が文系科目でまとまった。18年はこうした時間割の変更に加え、前年の現代社会の高得点などから、公民受験者は、軒並み受験者減となった教科の中で唯一、約1万3,000人(4.1%)増えた。

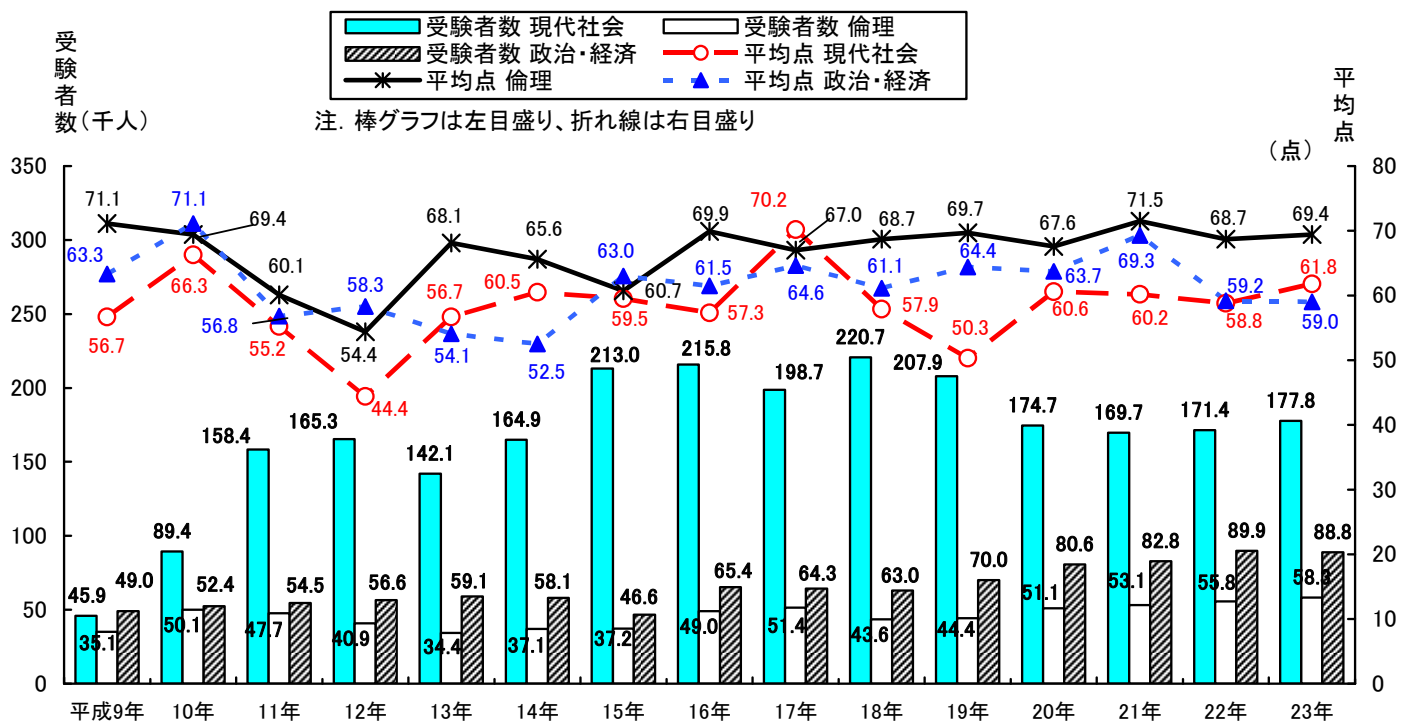
19年～21年までの公民受験者は、受験の半数以上を占める現代社会の過去の平均点大幅ダウン(17年70.2点→18年57.9点→19年50.3点)や低迷(18年～22年まで、公民3科目中で平均点最低)で、主に国公立大理系志望者による現代社会の敬遠などから減少が続いた。

22年は前年の各科目の平均点が比較的高かったことなどから、各科目とも受験者増となり、公民全体としても4年ぶりの増加に転じた。ただ、平均点は各科目とも軒並みダウンした。

◎ 23年の平均点は現代社会+3.0点、倫理+0.8点、政治・経済-0.2点で、倫理と政治・経済は前年並みであった。また、受験者数は、現代社会3.7%増、倫理4.3%増、政治・経済1.3%減で、公民全体では2.4%増となり、2年連続の増加となった。

下のグラフを見ると、公民各科目の受験者数の増・減は、当該科目の前年平均点のアップ・ダウンや平均点の高・低などに影響されている様子がうかがえる。

●公民[現社・倫理・政経]の受験者数&平均点の推移(本試験)



- 11年までは現社の受験者数が毎年倍増。しかし、平均点は下降傾向で、12年は現社と倫理で史上最低となった。
- 16年から公民は文系標準型の“必須科目”となり、16年の公民受験者は33万人超の史上最多となった。
- 19～21年は、現社のそれまでの平均点ダウンや低得点から受験者が減り、公民全体の受験者減にもつながった。
- 22年は政経と倫理の受験者増に加え、現社も4年ぶりの受験者増となり、公民全体としても4年ぶりに受験者が増えた。
- 23年は、政経の受験者が減少したものの、現社と倫理が増加し、公民全体では2年連続の増加となった。

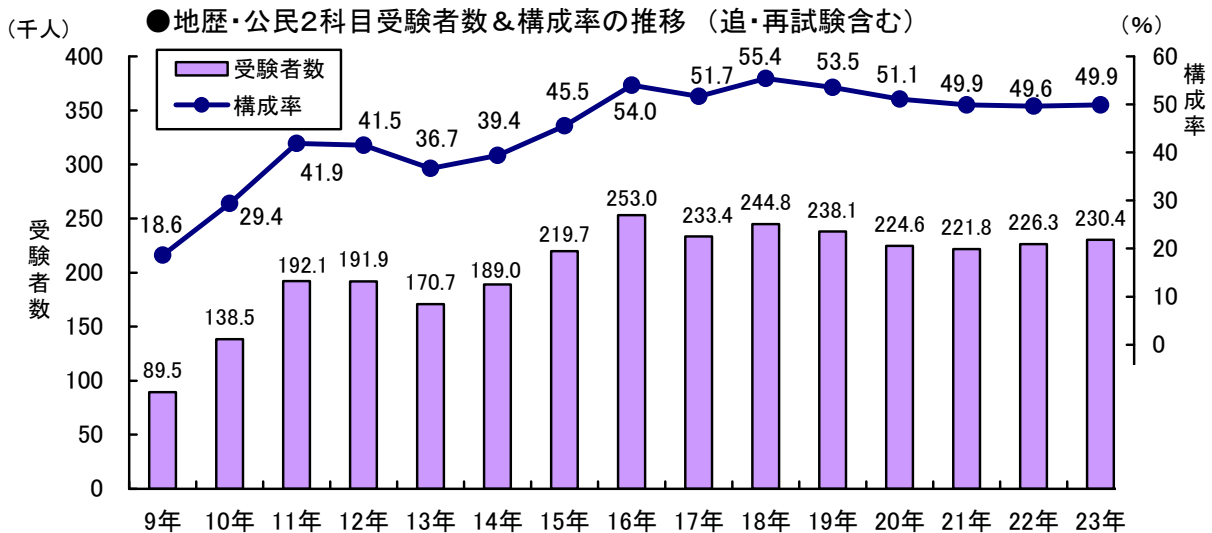
■地歴・公民;2科目受験者、2年連続の増加。構成率は5年ぶりのアップで49.9%

◎ 地歴・公民2科目受験は、「5教科6科目」（地歴・公民から1科目）時代においては、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、11年までは2科目受験者数(実受験者数)が激増した。16年は6教科7科目化で、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合(構成率)も初めて50%を超えた。

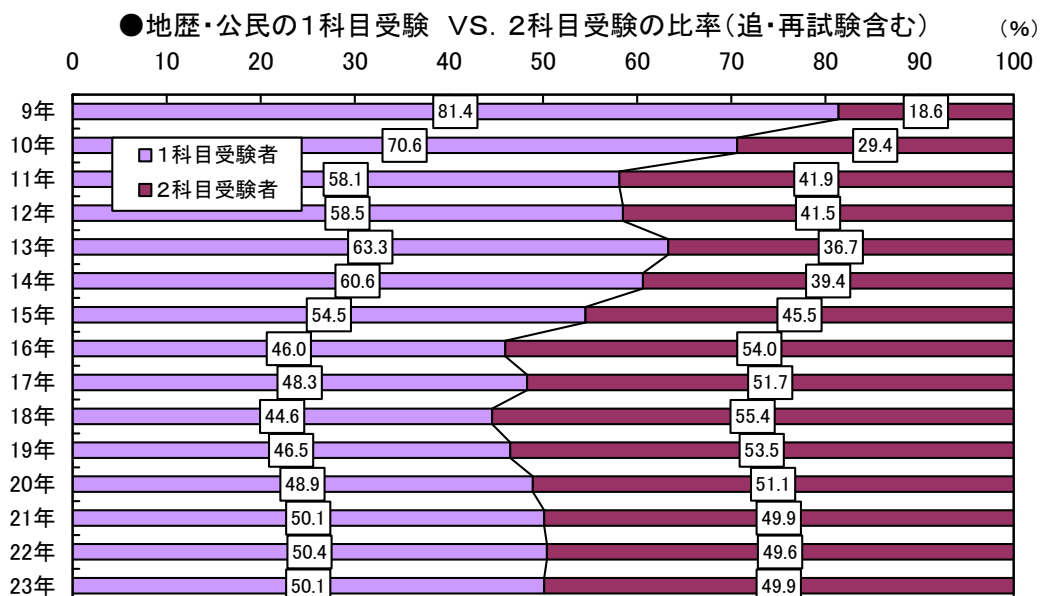
◎ 新課程入試となった18年は、時間割の変更などで2科目受験者は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人で、地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%。

19～21年は、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験者の減少、構成率の低下が続いた。22年は2科目受験者増となったが、その構成率は4年連続低下した。

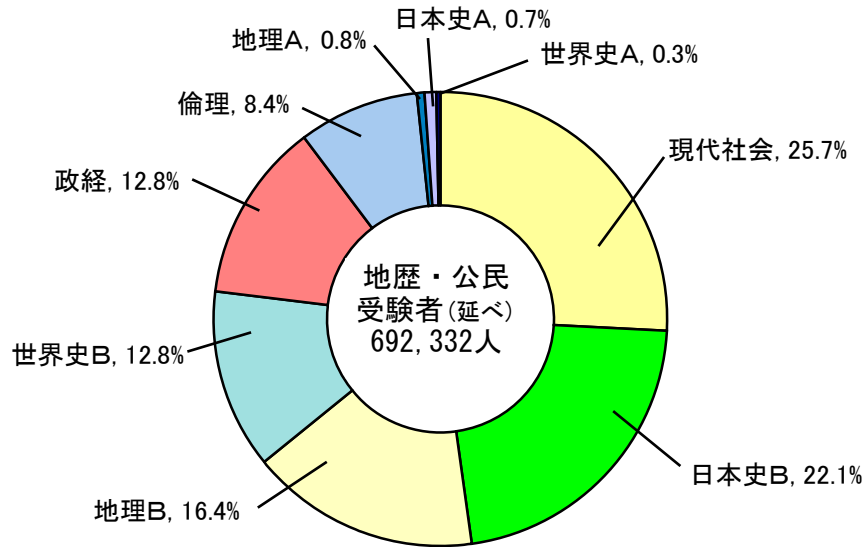
◎ 23年は地歴が約2,800人(0.8%)、公民が約7,500人(2.4%)の受験者増となったことなどから、地歴・公民2科目受験者も約4,200人(1.8%)増の約23万400人となり、2年連続の増加。また、2科目受験の構成率は49.9%で、5年ぶりのアップとなった。



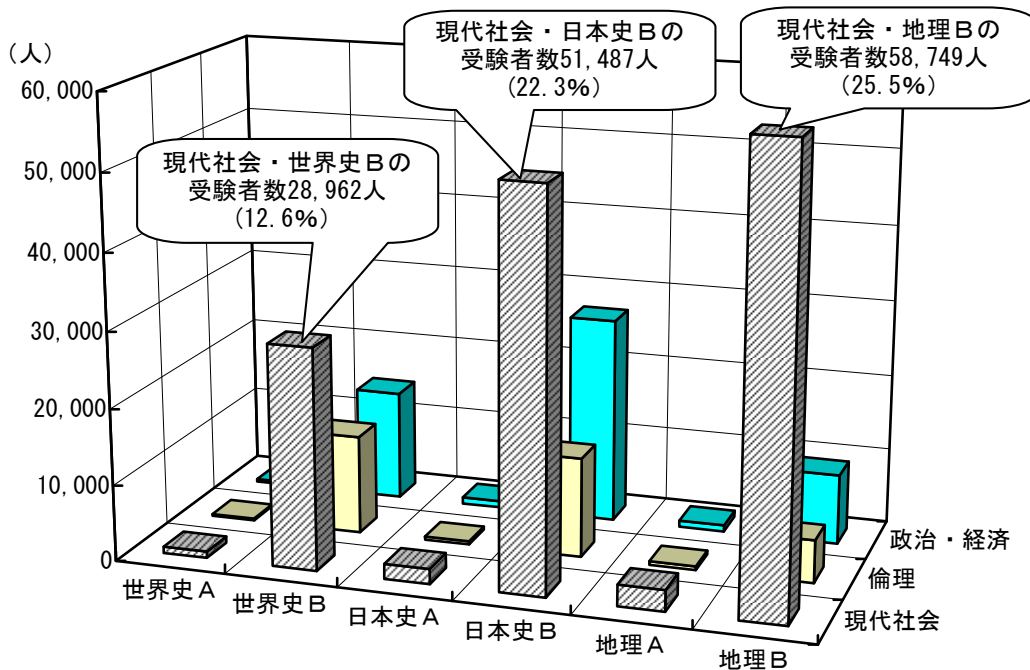
注. 「構成率」は、地歴または公民の実受験者数(1科目・2科目受験)に占める、2科目受験者数の割合。



●地歴・公民延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



●地歴・公民の2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



(人)

	現代社会	倫理	政治・経済
世界史A	862	254	307
世界史B	28,962	12,954	14,517
日本史A	1,994	414	871
日本史B	51,487	13,086	27,111
地理A	2,764	472	840
地理B	58,749	5,575	9,205

■理科;「理系」必須の物理Ⅰ、化学Ⅰの平均点アップ。生物Ⅰ、地学Ⅰはダウン

◎ 前回の旧課程入試開始の9年以降、23年までの理科の受験状況等は次のとおりである。

旧課程入試の開始当初、理科離れや学力低下、履修科目の不揃いなどから理系を中心に“理科2科目化”が進み、2科目受験者は17年まで11年を除き毎年増加していた。

特に、16年は5教科7科目化による国立大理系を中心に理科2科目必須となったことに加え、試験枠が増えて3科目受験が可能になったことなどから、2(3)科目受験者数(実受験者数で、3科目受験者含む。以下、同)は一気に増えて24万人を超え、理科受験者に占める2(3)科目受験者の割合(構成率)も62.6%に達した。

17年は、理科2科目必須とする国公立大(学部)のさらなる増加に加え、総合理科を含む2(3)科目受験の増加により、2(3)科目受験者数は前年より約7,700人(3.2%)増の約24万8,700人の史上最多を記録し、受験者の構成率も67.2%に達した。

◎ 現行課程入試の始まった18年は、セ試全体の受験者減や時間割の変更による試験枠の分断(17年までは、第1日目の後半に3コマ連続)などの影響で、理科の実受験者数は前年より約1万5,000人(4.1%)少ない約35万5,200人であった。理科2(3)科目受験者数は前年より約2万5,900人(10.4%)減の約22万2,800人で、構成率も4.5ポイント低下の62.7%。

19年は、理科全体の実受験者数は前年より若干減り、約35万4,800人だが、各科目の受験者数は増え、全体の延べ受験者数は約1,500人(0.3%)増の約60万7,100人だった。

20年は、理科全体の実受験者数が前年より約5,300人(1.5%)減少し約34万9,600人に。

21年は、理科全体の実受験者数が前年より約600人、0.2%の微増で約35万200人であったが、延べ受験者数は物理Ⅰと化学Ⅰを除き、各科目とも軒並み減少し、全体の延べ受験者数は前年より約3,200人、0.5%減の約59万3,900人だった。

22年の理科全体の実受験者数は、前年より約1万3,900人、4.0%増加の約36万4,000人だった。各科目受験者合計の延べ受験者数は、約1万7,400人(2.9%)増の約61万1,300人に達した。科目別では理科総合A、理科総合B、地学Ⅰといった、文系志望者が比較的多く受験する科目の受験者減が目立った。

また、科目別平均点については、化学Ⅰ(-15.8点)、物理Ⅰ(-9.5点)の大幅ダウンに対し、生物Ⅰ(+13.9点)、地学Ⅰ(+14.9点)大幅アップの対照が際立ち、理系・文系志望者にとって明暗を分かち結果となった。

◎ 23年は、理科全体の実受験者数が前年より約1万1,400人(3.1%)増え、約37万5,500人となり、各科目受験者合計の延べ受験者数も約2万8,700人(4.7%)増の約64万人に達した。科目別では全科目で受験者増となったが、特に文系志望者の受験が比較的多い理科総合A(前年比26.6%増)と理科総合B(同23.1%増)の大幅増が目立つ。

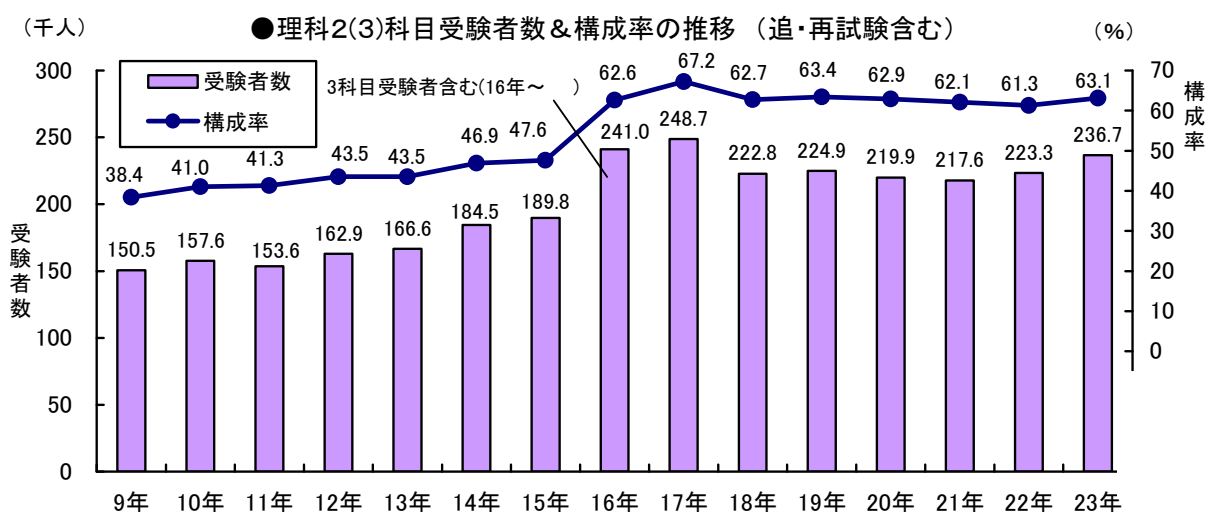
2科目受験者では、「物理Ⅰ+化学Ⅰ」(実受験者数)が約2,100人(1.9%)、「化学Ⅰ+生物Ⅰ」(同)が約1,300人(2.3%)、「生物Ⅰ+地学Ⅰ」(同)が150人(16.9%)それぞれ増えるなど、2科目受験者(実受験者数)は前年より約9,700人(4.9%)増の約20万9,000人となった。

また、理科2(3)科目受験者数は前年より約1万3,500人(6.0%)増の約23万6,700人で、2年連続の増加である。理科2(3)科目受験者数の理科全体の実受験者数における構成率も

前年より 1.8 ポイントアップの 63.1% で、4 年ぶりの上昇である。

科目別平均点については、理系志望者に必須といえる物理 I の大幅アップ(+10.1 点)に加え、化学 I もアップ(+2.8 点)したのに対し、文系志望者の受験が比較的多い生物 I (-6.3 点)、地学 I (-2.5 点)のほか、理科総合 A (-7.8 点)、理科総合 B (-10.3 点)も軒並みダウンし、理系・文系志望者にとって明暗を分かつ結果となった。

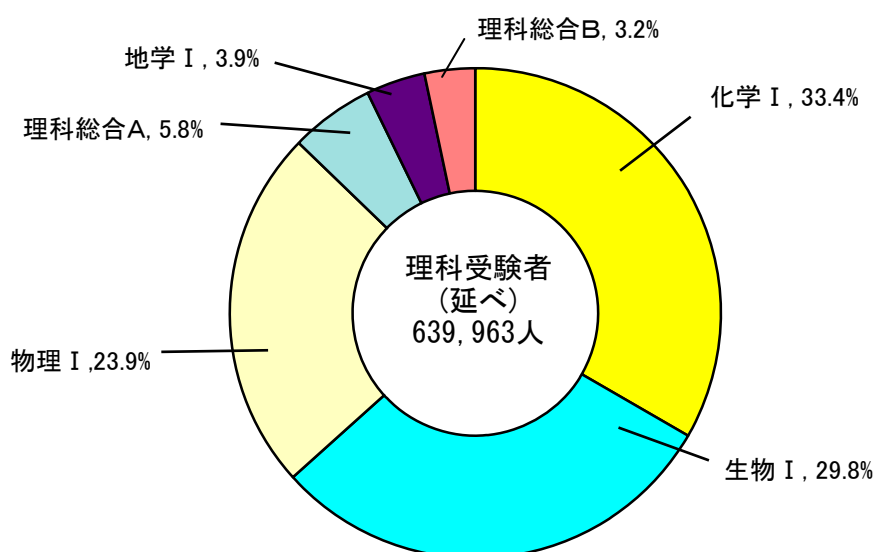
2 年連続で理科 2(3)科目受験者が増加した背景には、不況に強いといわれる理系への志望者増加え、理系に進学した後の専門基礎学力の担保として物理 I、化学 I を中心とした大学側の求めと、それに対する高校側の理系志望者への進学指導などがあるとみられる。



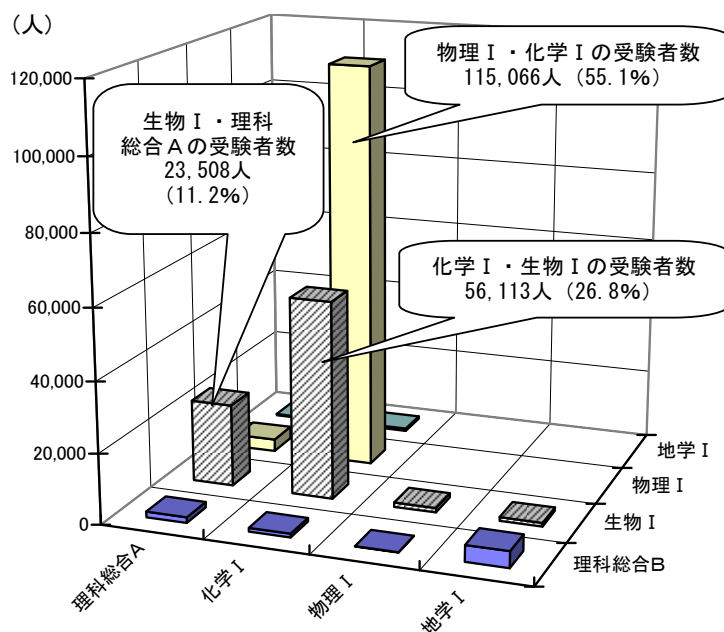
注1. 16年以降は理科3科目受験も含む(16年から3科目受験が可能)。

注2. 「構成率」は、理科の実受験者数(1科目・2科目・3科目受験)に占める、2科目及び3科目受験者数の割合。

●理科延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



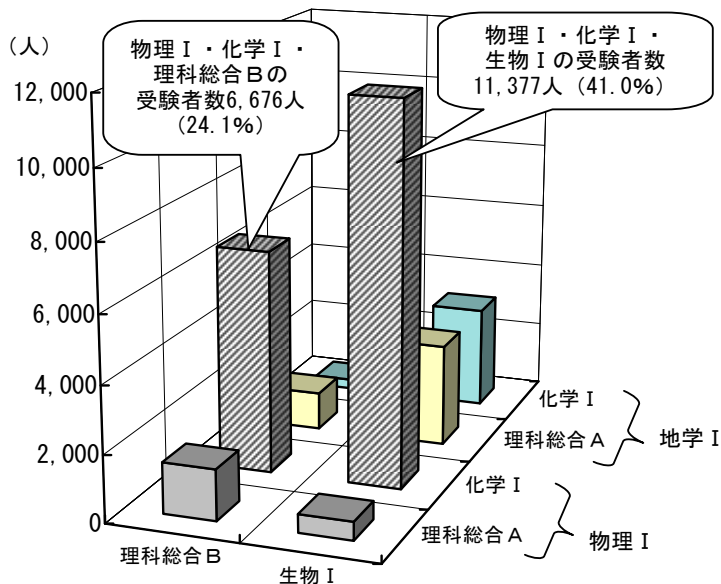
●理科2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(人)

	理科総合A	化学I	物理I	地学I
理科総合B	1,586	1,050	113	4,639
生物I	23,508	56,113	1,230	1,036
物理I	3,561	115,066	—	—
地学I	408	687	—	—

●理科3科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(人)

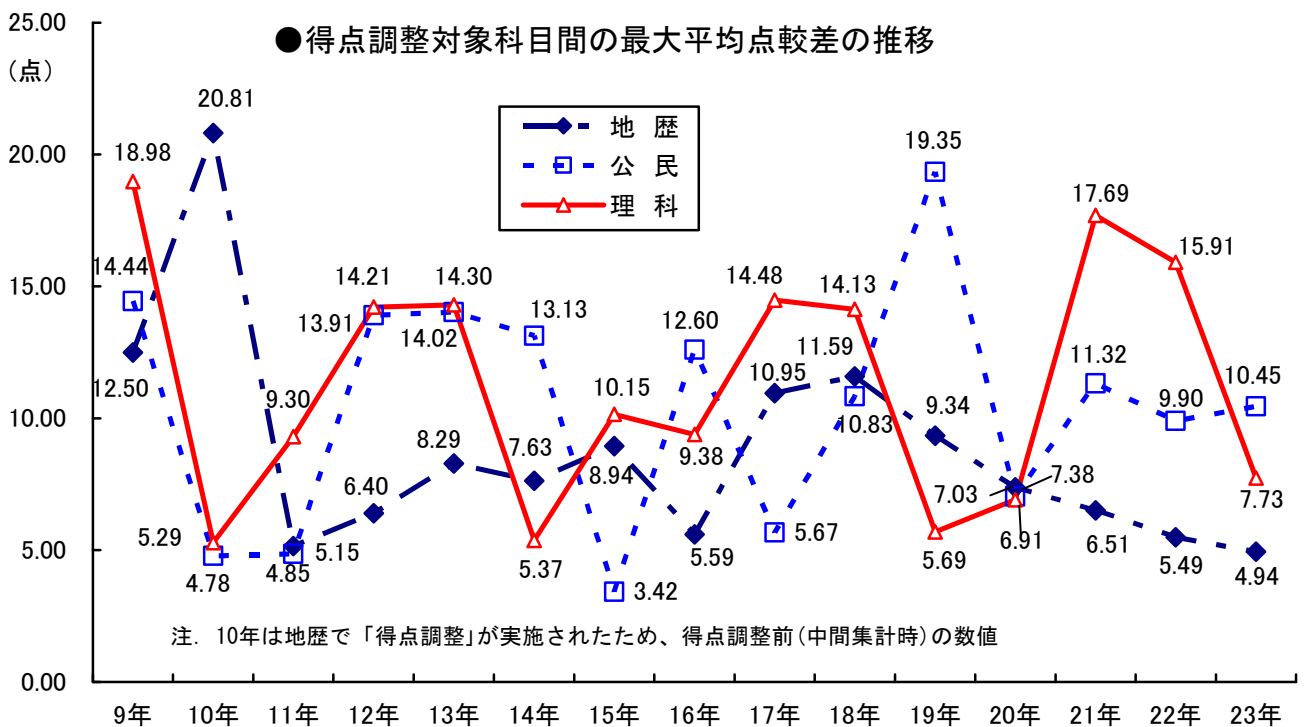
理科③	物理I	地学I				
理科②	理科総合A	化学I				
理科①	理科総合B	1,520	6,676	理科総合A	1,148	293
	生物I	544	11,377	化学I	3,088	3,098

■**得点調整**;対象科目間の平均点較差「倫理－政治・経済」＝10.45 点で、調整なし

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民の各科目間、及び理科の各<I科目>間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

23年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴;地理B－世界史B＝4.94点、公民;倫理－政治・経済＝10.45点、理科;地学I－化学I＝7.73点で、最大較差の公民でもガイドラインの20点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

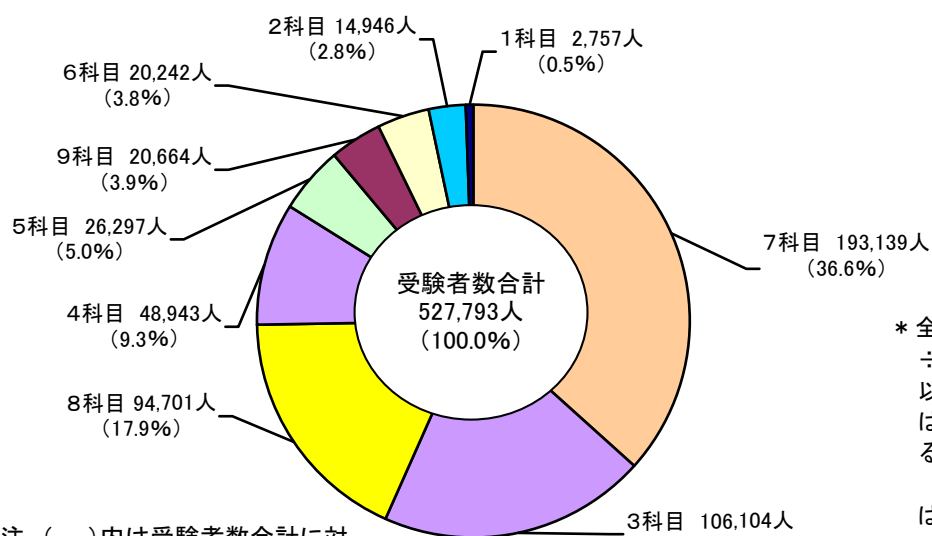
注) 旧課程入試(9年～17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

■受験科目数別の受験状況;8・9科目の多数科目受験者、大幅に増加

◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移(下図)をみると、16年以降、国公立大の「5(6)教科7科目」化によって「7～9科目」受験が急増し、高い受験率(当該科目数の受験者数÷全受験者数×100)を示している。

◎ 23年は全体の受験者が約7,200人(1.4%)増加した中、4科目～9科目、及び2科目の各受験者が増えた。特に8科目受験者の約4,300人(4.8%)、9科目受験者の約3,300人(19.0%)の増加が目立つ。受験率の最も高かったのは7科目受験で、前年より0.3ポイント下回ったものの36.6%だった。平均受験科目数は、前年より若干増加の5.86科目である。

●23年センター試験／受験科目数別受験者数

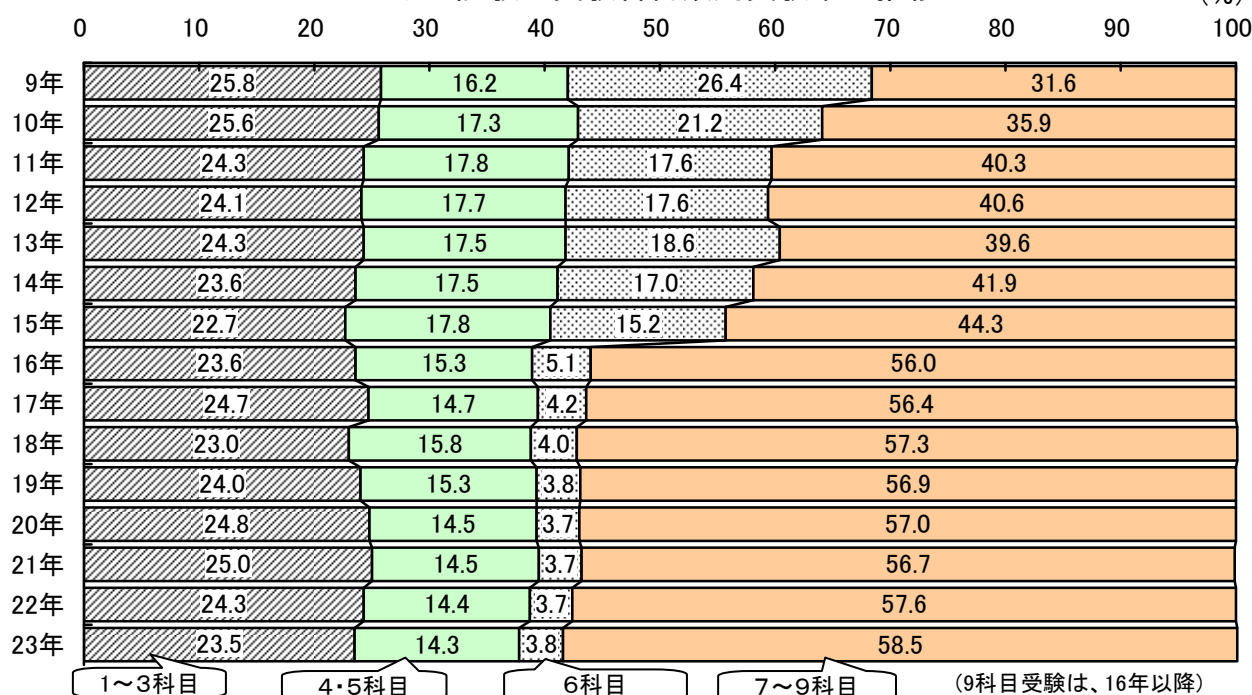


注。()内は受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。

* 全体の受験率(全受験者数÷志願者数×100)は19年以降上昇傾向にあり、23年は前年を0.3ポイント上回る94.4%である。

なお、これまでの最高は、セ試開始時(2年)の94.9%。

●センター試験／受験科目数別受験率の推移



注. 受験率は、受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。